心理コーディネーターになるために Vol.11

山下桂永子

☆年度はじめの相談枠争奪戦

年度初めに行われる継続ケースの担当者決定会議の一幕。

継続ケースの時間、曜日、担当者を決めていく作業の中で、ある相談員の先生が予定表を見ながら冷静に私に伝えてくださる。「山下先生、その時間はもう部屋があいていません。」「え？ほんとだ！じゃあ曜日を変えてここは？」「山下先生、そこはもう担当できる人がいません。」「わ！そうなの！？じゃあ時間をずらして。。。」「山下先生、保護者が仕事の都合で16時以降でないと来れないと言っています」「ええ～？あ！ここ入るんじゃない？」「山下先生、そこは A 先生が担当かぶってます。A 先生が分裂でもしない限り無理ですよ」若い相談員の A 先生が驚いた顔で、「え？え？えーと、ぶ、分裂、がんばります！」などと言う。「いやいやいやいやいやちがうちがうちがう！うーん、はまらん。やっぱり枠が足りない。。。うーんどうしよう。。。」

☆担当者決定会議

担当者決定会議は、前年度末に面接の継続が決定されたケースについて、曜日と時間、担当と使用する部屋を決めていく、年度初めに 2 週間ほどかけて毎日行われる会議である。もちろん継続ケースなので、昨年度と担当やプレイセラピーで使う部屋を変更しないように努めてはいる。しかし保護者や本人の希望日時とこちらが提供できる条件との折り合いがつかないことがしばしばある。継続ケースの数は年々増えてきており（2023 年度の継続ケースは 90 件ほど）、相談枠と保護者の希望とのマッチングが年々難しくなってきている。さながら降ってくるブロックを回転させながらそろえてはめていく、パズルゲームのようである（そろってもブロックは消えないが）。

継続ケースは年度末の終了判定会議で、必要性が散々議論された上で、教育センターでの面接を継続すると判断されたケースである。枠がないからといって断るという選択肢はなく、どうにかこうにか工夫をして入れ込んでいくしかない。近年では、教育センターの通所について、保護者や本人が希望すれば遅刻早退扱いにならないよう学校園にお願いしているが、それで時間をずらして相談枠を増やして対応するにも限界がある。

☆変更のリスクと相談員の葛藤

担当する継続ケースの曜日や担当、部屋の変更は、相談員にとって、どれもできれば避けたいことである。保護者面談もプレイセラピーも安定的で継続的な構造は、クライエントやセラピストに安心感、安全感をもたらし、その結果、連続性のある関係性と質の高いセラピーが提供できるというのは基本的かつ重要なことである。そのセラピーの構造を変えなければならないのはできれば避けたい、いやなんとしても避けたい。そうでなくてもクライエントは、進級や進学で、日常が変化と不安だらけのことが多い年度初めなのである。せめて教育センターに来た時ぐらい変化のない、安心安全なセラピーを提供したいと思うのが相談員の心情である。

継続ケースの担当や部屋を変更することはセラピーの構造や枠組みに変化をもたらし、担当者とクライエントの関係性に少なからず影響するものなので、そこには当然リスクを伴う。そんなリスクを負いたくはない。しかしどこかで妥協しなければ担当するケースの継続そのものが危うい。一番高いリスクは何か、それを避けるには他のリスクを背負ってでも変化を受け入れるしかないのか、それともこのまま押し通すことができるのか。相談員はみんな葛藤を抱える。年度末の終了判定会議ですべてのケースについて、相談員全員でケースの内容を共有しているので、お互いのケースについてのリスクも承知している。心理指導員である私も多くの担当ケースを持っているので、その心情はよくわかる。

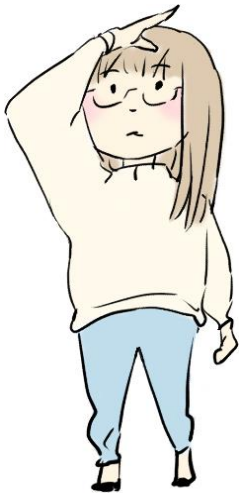
☆心理指導員としての葛藤

しかし、心理指導員としての私は、教育相談全般のコーディネートを担う立場である。4月中旬から始まる教育相談スタートまでに全ての継続ケースについて担当、曜日、時間、部屋を決めるまでこぎつけなければならない。あれこれパズルゲームをしてもどうにもならないとき、できるだけリスクを抑えた形で変更することを相談員に提案していかなければならないことも多い。

「どなたか曜日とか部屋を替われそうなケースありますかね？」「私がＡさんの保護者に連絡とって、他の曜日に移れないか聞いてみるので、Bさんのプレイセラピーの部屋を変更は可能ですか？」「昨日決まったCさん、保護者担当の変更は

可能ですか？」「Dさんの月に２回の面談を１回に減らして、その裏にEさんの面接を月１回入れたらいけませんかね？」など、なんとか継続ケースが限りある相談枠に入るように、相談員の方々に提案することになる。しかし私自身は、提案やお願いはしても決定権があるわけではないし、提案によるリスクを私が負えるわけではないので、提案をしたら、あとは待つしかない。

会議に出席している相談員には緊張が走る。数秒が長く感じる沈黙。その後、相談員の中で「B さんのお母さんに他の曜日に移れないか聞いてみます」「部屋の変更は大丈夫だと思います」など言って下さるなど、それぞれの葛藤に折り合いをつけてくださる方がでてきて、毎年助けられている。その場では折り合いがつかずに後から個別にお願いすることもあるが、それも渋々承知していただくというよりは、他のアイディアを出してくださったりすることも多い。



そして担当が変更になったとき、それが相談員にとって不本意で、担当ケースを手放すことが忍びないことはあっても、そこは相談員同士で丁寧に次の担当に引継ぎが行われる。相談員同士の信頼関係の中で、バトンが引き継がれていくのである。前年度の担当も、新年度の担当もそれがクライエントにとってベストな選択ではないかもしれないが、変化のリスクをチャンスに変える機会にしていくようにするしかない。そんな毎年の相談員の方々のいろんなせめぎあいの中で気づいたことは、担当する相談員は決まっていたとしても、そのケースは教育相談員全員で抱えているのだということである。

☆チームで行う教育相談

普段から教育相談では、終了判定会議や担当者決定会議、新しいケースの受理会議などの会議を通して、今誰がどのようなケースを担当して、そのケースの内容はどのようなものか、自分の担当ケース以外のことも見立てや情報を共有している。

そういった仕組みがあるので、年度初めの担当者決定会議で、少なからず担当や部屋の変更があっても、それぞれの相談員が納得してリスクを背負い、誰かに決められたわけではなく、主体的にケースを担うということができているのだろうと思う。

そして担当が変更されて、面接自体は個別の 1 対 1 であっても、その背後には、相談員同士の信頼関係に基づいた丁寧な引継ぎと、会議でぶつかりながら練り上げられた見立てや関わりの方針があるので、新しい担当者が自信をもって対応することができる。教育相談はチームでやっているのだなと常々感じている次第である。